資料館ノート　第77号　　平成20年9月16日発行

江戸の名物・名産と江東地域③

江戸湊・隅田川と名物

江東区深川江戸資料館

江戸の名物・名産には江戸やその周辺で生産・収穫されたものだけでなく、全国から集められた生産物や加工品が、江戸で名物になるという側面も見落とせません。「地方出身の若者が、東京でスターになる」といったことと同じでしょうか。本号では、名物・名産をつくり上げた土壌の形成について、江戸湊の成立や深川の役割を中心に考えてみましょう。

1．江戸の形成と湊（みなと）の機能

天正18年（1590）、徳川家康が江戸に入りやがて幕府が開かれましたが、その過程で城下町江戸が形成されました。江戸城の東、日比谷入り江が埋め立てられて武家地となり、さらにその東側の江戸前島と呼ばれた半島（日本橋川辺から南へ細長く伸びて新橋辺までの地域）に神田・日本橋・京橋といった町人地が作られました。これが「元祖・下町」ということになります。

江戸城を中心に考えると、日比谷入り江は城に隣接する湊としての役割も果たしていましたが、埋立が進むに連れて江戸の湊としての役割は、日本橋川や隅田川河口部が担うことになりました。

隅田川河口といっても、その場所は今の日本橋人形町周辺で、八町堀や霊巌島（れいがんじま）などが未整備の時代には、相当北の方にまで船が入っていたことになります。右の地図は寛永年間（1624～44）の江戸図です。すでに八町堀（八丁堀）や霊巌島などが造成されていますが、その西方にはいく筋もの櫛の歯状の舟入堀が掘られ、その中央辺りには外堀まで直結する長い堀までが開かれています（現八重洲通り）。かつてはここに船が横付けされて、材木を始め多くの物資が陸揚げされ、新興都市・江戸の建設に利用されました。

舟入堀の南端には八町堀（延長が八丁、約千m）とそれに続く京橋川が流れ、その南には海が迫っていました。江戸幕府成立前後の江戸ではまさに江戸湊に運送されてきた物資がこれらの運河によって市中へと搬送され、まさに「水の都・江戸」の原形が造られていきました。

2．日本橋川・堀留・隅田川沿岸

こうした水路網により、徳川家や幕府から特権を与えられた有力町人や豪商が日本橋川の北側、本町界隈を中心に集住し、人と物資を継送る幕府の伝馬役や職人役などの役を負いながら江戸の町人地、下町を築き上げていきました。

『寛永江戸図』（1624～44）古地図史料出版
図の中央を蛇行して東西に流れる日本橋川、そこから2本の掘留川が突きだし、その北方が江戸経済の中心、日本橋本町です。このあたりが江戸湊の最奥部でもありました。南には舟入堀も描かれています

その本町にも近い日本橋川には2本の角（つの）のような堀留になった堀が突き出ています。のちに堀留川と呼ばれる川で、もともと石神井川がここから江戸湊に注いでいましたが、洪水による被害を考えて、流れは神田川の方へ付け替えられました。しかし、江戸の湊機能を充実させるため、船の停泊や荷揚げのためにこの堀が残され整備されました。沿岸は米河岸や塩河岸などと呼ばれ、蔵が建ち並び廻船（かいせん）問屋や大問屋がひしめく町になりました。まさに一大経済都市・江戸の象徴といえます。

前述の八町堀は土地の整備後は、江戸の寺町として発展しました。まだ町人地が限定されていたため、舟入堀より隅田川に近いこのあたりは郊外といったイメージだったのでしょう。しかしやがて多くの寺院はさらに江

戸の周辺部に移転し、問屋や倉庫の町になっていきました。また町奉行所同心の組屋敷が置かれたことでも知られるようになりました。

その東隣の霊巌島は周囲を日本橋川や亀島川に囲まれています。江戸初期には徳川家親藩の越前藩松平家の屋敷と寛永元年（1624）に創建された霊巌寺がありましたが、明暦の大火（1657年）後、霊巌寺は深川に移されたため、その広大な境内地は町場に変わり、酒問屋を中心とする問屋と蔵の町になりました。

島の中を流れる新川は、全国航路の西廻り航路や東廻り航路を開発したという河村瑞賢が開いたとされています。

3．深 川 へ

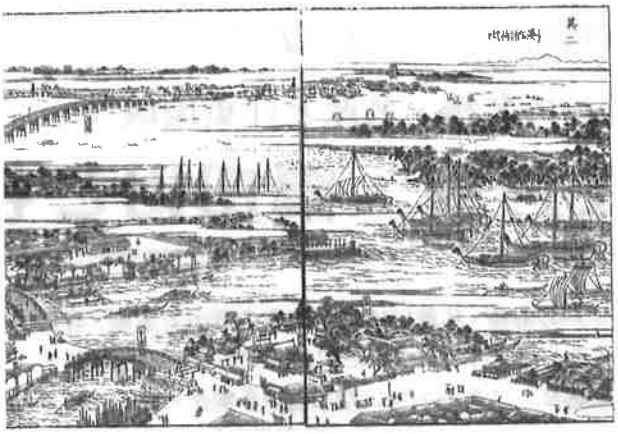
日本橋周辺に町人地の中枢が置かれ、東方の隅田川に近い地域に掘割りがめぐらされ、問屋と蔵の町になっていったこの時期、深川は隅田川沿岸に小名木川付近から南へ突き出た半島状の土地に、寛永18年（1641）日本橋舟入堀沿岸や神田佐久間町などから材木置場が移転してきました。深川が蔵の町になることは時間の問題でした。すでに小名木川西端の隅田川口に置かれていた船番所は、寛文元年（1661）には東端の中川口へ移され、江戸へ流入する物資の査検にあたっていました。

元禄14年（1701）材木置場が深川東方の入り江を埋め立てて土地が整備されて移転すると、かつての材木置場の掘割りに過ぎなかった水路が東へと延長され、仙台堀・油堀になり、北からは大横川・横十間川が小名木川から南へと延伸されました。江戸初頭の深川の成立、明暦の大火後の本所深川開発、元禄末の木場「大移動」と周辺の開拓・整備といった過程を経て、深川の町は掘割りと蔵による流通の拠点としての町になって、江戸経済の一翼を担うことになりました。

そしてこの掘割網が関東全域に通じていったこと、また利根川筋や、霞ヶ浦、鬼怒川、江戸川、渡良瀬川、新河岸川等々の河川が水路として整備され、沿岸に河岸が開かれると、関東で生産、製造された物資が江戸へと運ばれるようになりました。ことに深川を始め江東地域の掘割網は、関東の川筋（これを奥川筋といいます）に通じていたことから、関東で生産・加工された商品が、各地の河岸を経由しながら深川へと集められるようになりました。

4．「下り物」と「地廻り物」

当時の経済は、江戸時代中期頃までは、手工業生産の中心は上方で、京の西陣織、灘・伊丹の酒など現代にまで続く伝統的な生産物があり、江戸でも上方が圧倒的に優位で、上方からの「下り物」こそが高級品で、



『江戸名所図会　湊稲荷社』（天保7年　1836）
図下方の神社が湊稲荷神社（現鉄砲洲稲荷神社）で、右手には大型船が今まさに江戸港に入港しています。左手には八町堀・亀島川などの隅田川に注ぐ運河が幾筋も口を開け、その西方に広がる日本橋・霊巌島などの経済の中心をうかがわせます。永代橋の向こう側には、深川が対比的に描かれています。

同様の商品でも関東の商品は「地廻り物」として品質も劣るものとされていました。

しかし、行徳（市川市）の塩業をはじめ、江戸中期の天明の飢饉などを克服した関東地方にも、商品となりうる物資が各地で生産されるようになりました。これを江戸地廻り経済圏と呼んでいます。

銚子や野田（千葉県）の醤油はその好例です。江戸でもはじめは関西の薄口醤油が主流でしたが、やがて関東産の濃口醤油が薄口を駆逐し、それが上方とは異なる江戸の料理文化を生み出し、支えるようになりました。

このほかにも八王子・足利（栃木県）・桐生（群馬県）などの織物・生糸、同じく八王子の石灰、青梅の林業、上尾周辺（埼玉県）の紅花、狭山（埼玉県）の茶、常陸（茨城県）・下野（栃木県）の山間部でさかんになった紙製造、銚子方面で加工されて出荷されていた干鰯など、現在でもその地方の特産品として知られる物産が誕生しました。

こうして江戸で消費されて評判となり、その品質のよさが喧伝されて名物が生み出されるようになります。いくら良い品質の商品でもその地方だけで消費されていては、当時から名物として名を馳せるということはなかったでしょう。

関東を中心とする商品生産は、開かれた河川による水運によって江戸へ搬送されることで、名物となり、当時の地誌や浮世絵などに残されるようにもなりました。農作物でも江戸近郊の野菜や果物（水菓子）などの中から、いくつもの名品が誕生しています。従来の幕府が描いた商品の流れ、「上方から江戸へ」というパターンは必須の事ではなくなりました。

江戸時代の江戸を廻る名物・名産を考える時、その誕生の背景には、このような大消費都市とその流通システムがあったことが重要な要素でした。